

日程に沿って感想を述べる。

・シンガポール

① シンガポールの地理的特性について

まず、シンガポールの地理的特性について考察する。シンガポールは福島市より若干狭い面積の領土に、約 500 万人が住む、非常に人口過密が進んでいる都市であり、市街地、郊外問わず至る所に高層の集合住宅が認められた。また、多数を占める中華系国民と、少数派の 3 民族が同居する国家であることも特徴的であると考えられる。



【市街地にある高層の集合住宅と、中国の正月である春節を祝う飾り】

今回の研修で出会った医師や研修医などの医療スタッフのほとんどが中華系であったのに比べて、ホテルのドアマンなどの職種においては、インド系やマレー系の人々が占めるなど、人種間の格差は存在するように思えた。しかし、社会全体としては融和する方向にあり、明らかな差別などは認められなかった。また、緯度的には赤道のほぼ直下であり、熱帯モンスーン気候に属しているため、年中高温多湿であるが、衛生状態は非常に良く、水道水が飲水可能であった。そのため、他の東南アジアにみら

れるような感染症についての心配は比較的少ないと考えられた。

②シンガポールの医療システムについて

シンガポールは幼少期からの受験競争が日本以上に激しく、小学校 4 年生の試験から段階別振り分けが開始される。その後も何段階ものテストで勝ち抜いてきたものが大学に入学でき、その中のトップクラスのものが医学部に入学できる。ちなみに浪人しても大学に進学できない。また、医学部を卒業し医師免許を取ったとしても、各科ごとに定員が決まっており、人気のある科の専門医にはなかなか入れないという。

シンガポールの個人向け福祉厚生は、中央積立基金 (CPF: Central Provident Fund) という、日本における年金のようなシステムが用いられる。被雇用者の給料の 2 割が基金に源泉徴収され、雇用者も同額を基金に納める。この、給料の 4 割に相当する基金は、基本的には退職後の年金に充てられるが、保険者あるいはその血縁が疾病の際は一定額を下ろして医療費として用いることができる。つまり、この金額は有限である。大多数の国民にとっては、たとえ疾病があっても短期間の受診・入院で済むので、この有限の基金でも問題は無いと考えられるが、例えば重度の統合失調症のような、ほぼ一生涯医療機関にかか

る必要である状態の国民がいるはずであり、そういった場合にどのように対応するのが、出国前から抱いていた疑問であった。今回、シンガポール総合病院で研修医と懇談した際、精神科の研修医に上記の点を質問してみた。すると、まずは本人や血縁の基金を活用するが、最終的にはメディファンド（Medifund）という、政府の支出による生活困窮者の医療費補助基金を活用するとのことであった。

シンガポールは、人口 100000 万人における医師数が 160 人であり、200 人である日本よりさらに少ない。少ない医師での高レベル医療を実現できている理由を考察する。

第一に、シンガポールの国土が狭いことに加え、各科の定員を制限することにより、効率のよい医療サービスの配置が可能であることが考えられる。



【Singapore General Hospital】

第二に、コメディカルとの連携がより進んでいることが考えられる。リハビリにおいてOTの裁量が日本よりも大きかったように感じられた。

第三に、保険システムによる受診の抑制が考えられる。シンガポールでは、基本的には自由診療であり私立病院では高額な医療費を請求される。公立病院で請求される医療費はそれほど高くはないが、診察を希望する人

が多く、受診するまでに時間がかかる。また、いくら公立病院が割安でも基本的には全額自費であり、保険を使うとその分将来の年金が減ることになる。つまり、困ったときは積み立てた基金を使えばいつでも受診できるが、将来のことを考えたら、慎重かつ効率よく受診をすることが必要であり、無駄な受診が抑制されているのではないかと考えられる。今回シンガポール総合病院内を移動中、玄関ロビーで無料の血糖測定コーナーが設置されており、そこには検査希望者が殺到していた。これは、常日頃から健康に留意し、検査による予防を心がけている国民性の一端を表しているように思われた。

・オーストラリア

① オーストラリアにおける医師育成について

オーストラリアには、日本のような統一された医師国家試験は存在しない。それぞれの大学がそれぞれに試験を行い、卒業時の総合判定で認められれば医師免許を得ることができる。つまり、各大学に裁量が委ねられているため、それぞれの大学が自由にカリキュラムを作ることが可能である。今回 Bond 大学でお世話になったアンさんは、同大学での一期生であるが、大学のカリキュラムも試行錯誤で作られており、学生側からのフィードバックで翌年度のカリキュラムに反映させているとのことであった。

② 医療システムについて

オーストラリアの医療システムは、救急を除けば、どんな病態・疾患でもまずは GP(General Practitioner)を受診し、GP の判断で専門医を紹介受診するという診療体系が



【Gold Coast Hospital】

構築されている。前述のアン氏によると「風邪の子供を、小児科専門医が診るなんてありえない」ということであり、それだけ、GP による初期診療システムが根付いていると言える。また、治療にかかる費用であるが、健康保険であるメディケアを利用し、公立の病院を受診すれば安い費用で済むが、その分混雑していることが多く、手術が必要な場合でも数ヶ月待たされることがあるということであった。

③ 血液供給システムについて

別紙の活動日誌でも述べたが、オーストラリアの献血・血液供給システムは、基本的には日本のシステムと大差はなかった。ただし、血液輸送システムに関しては、日本とオーストラリアには根本的な差が生じてしまうことが考えられる。日本においては国土が狭く、また新幹線や高速道路など高速輸送を可能にするインフラがほぼ整っているために、地方で血液が大量に必要となった場合でも、比較的短時間で供給が可能である。しかし、オーストラリアは日本の約 20 倍の面積に、日本の約 6 分の 1 の国民が住んでおり、高速輸送においては飛行機に頼らざるを得ないのが現状である。オーストラリアには全国民の約 6 %が O 型 Rh (-) の血液型を持つため、この血液は緊急時の輸血用に備蓄・活用されているという。しかし、例えば深夜に地方の病院で大量に血液不足に陥った場合に、十分な量の血液を迅速に輸送するシステムは、まだ確立していないとのことであった。

・研修ツアーの総括

ツアー開始 1 ヶ月前に招集がかかり、そこから準備が始まったため、とにかく間に合わせる事が最優先になってしまい、調査から疑問点を抽出し、その疑問点について現地で調査する、というような腰の据わった研修ができなかった点が悔やまれる。また、研修医それぞれが英語に関する能力に乏しかったため、英語力があれば得られた知識や経験が、十分に得られなかったことも事実である。そこで、もし今後も同様の研修ツアーが開催された時に必要な準備などをここでフィードバックしておく。

① メンバー内の役割分担

今回、メンバーの中で短期の海外研修ツアーの経験があるものは、私を含め 2 人だけであり、海外渡航が初めてのメンバーもいた。さらに、出発まで約 1 ヶ月という期間を考えたら、経験者が独断でも決めて行かなくては間に合わない判断し、自ら連絡係を申し

出て、初会合の日のうちにメーリングリストを作成し、航空券のチケット購入、海外保険加入、ビザ取得方法などのアナウンス、日程表、連絡先一覧などの作成も行い、出国前から帰国時までの金銭管理も行ったが、これは私がたまたま比較的余裕がある研修を行っていたから可能であった。

次回以降は、情報係（メーリングリスト管理・名簿・日程表作成）、渡航係（ホテル、パスポート、飛行機チケット、ビザ、保険の手配と管理）、会計係（ホテル・交通機関・おみやげ・会食時の支払い）をそれぞれ独立させることが望ましいと考えられる。ツアーメンバーに余裕があれば資料係（プレゼン用のパワーポイント・ツアー中の写真データ管理・終了後の再配布）も別にしたほうが良いと思われる。

② 研修時の情報収集と事前準備

海外研修を行うに当たり、最低限必要なのは、「海外で知りたい事柄」が、日本においてはどうか？ということを知っておくことである。例えば、医師不足問題について他国と比較するためには、日本における国民 10 万人当たりの医師の割合と面積、人口、GDP と、GDP における医療費の割合、保険システムなどが世界各国に比べてどうかを知らなければ、論じることは不可能である。

今回はツアー中の情報収集の練習ができず、それぞれが思うがままに写真を撮り、話を聞くという体制になってしまった。もしも出発数ヶ月前に研修先とその内容がわかっていたら、日本における同様の施設を訪問し、資料を集めることをお勧めする。そうすれば事前にどのような内容になるかを想定して、質問の内容と撮るべき写真が絞られるはずである。例えば、日本と他国とにおける医療システムについて比較したければ、単に目にとまった医療器具を撮影するのではなくて、外来や受付にあるマニュアルや連絡体制などについての質問、撮影を重点的に行う必要が出てくることがわかるからである。

謝辞

今回のツアーが無事に行えたのは、葛西先生、ノレット先生、石川先生、大谷先生、加藤さんをはじめ医療人育成センターの皆様、研修を許可した心身医療科の先生方、そして快く受け入れてくださったシンガポール・オーストラリアの研修先の皆様のおかげです。この場を借りて厚く御礼を申し上げます。また、適当で自分勝手な私と約 10 日間寝食を共にしてツアーにつきあってくれた大槻先生、白田先生、鈴木先生、知識先生、吉成先生に感謝申し上げます。どうもありがとうございました。

